

子どもの造形活動の指導と素材研究

—森育と読み聞かせより—

“The Study of the Instructions and the Materials Used for Children’s Craftworks”
—Forest Education and Reading Children’s Books to Children—

黒 阪 陽 一・武 石 英 孝

Youichi KUROSAKA, Hidetaka TAKEISHI

I 問題

幼児は、日常の遊びや毎日の生活の中で様々な刺激を受け、敏感に成長を重ねていく。周囲の大人との会話など多様な体験を通して、心とバランスを保ちながら自分の世界を広めていく。しかし、近年の子どもを取り巻く世界は子どもの親の世代とは全く異なるものとなっている。文部科学省の初等中等教育分科会でも近年の急激な社会変化を受け、「子どもたちは、多くの情報に囲まれた環境にいるため、世の中についての知識は増えているものの、その知識は断片的で受け身的なものが多く、学びに対する意欲や関心が低い」と指摘している。その背景には地域社会や家庭の教育力も低下しており自然や公園などの遊び場が少なくなる一方で、テレビゲームやインターネット等の室内の遊びが増えるなど、偏った体験をよぎなくされている（文部科学省の初等中等教育分科会2005）。その結果主体的に活動しようとする意欲やコミュニケーション能力が低下し、造形活動においても自分を表現する事が苦手な子どもが多くなっているのではないかと考えられる。

平成29年3月31日に改正された幼稚園教育要領の感性と表現に関する領域「表現」として「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」とある（文部科学省、2017）。これはまさに子どもの日常活動から生まれる発見や喜び、悲しみなどの感情を素直にのびのびと表現できる力を幼児期に養うことを求めているといえよう。造形教育の面から見ても、いろいろなものの美しさや生活の中での発見を人に伝えるとき、言葉だけではなく、絵に描き表したり、何かを利用して三次元的に表現したりして“かたち”にする自己表現はこの時期にはとても大切な活動である。また、子どもの健やかな心の発達にとっても必要不可欠な活動といえ、近年は、保育活動を芸術療法という視点から捉えなおす動きもみられる（半田、2017）。

私のこれまでの指導実践の中では、絵を描いたり物を作ったりするのが得意あるいは好き

な子どもには、幼少期からの継続した経験や自己を表現する体験の喜びを味わった子どもが多い。

そこで、本研究では幼児が興味を持ってその成長過程にあわせた表現活動ができるような指導とはどうあるべきか、さらに造形活動へと結びつく意欲をいかに高めるかの方策を材料研究とともに鑑賞教材へと結びつく流れを援助できる「造形表現」の指導方法を探る。

Ⅱ 研究目標

幼児自身が興味をもって、のびのびと造形遊びをし、成果に満足できる環境をつくる。

Ⅲ 保育目標

- 1 保育者側の教材・環境整備の事前準備により、幼児が自ら製作したいと思わせる意欲を引き出すことで、“もの”をつくる喜びと達成感を知る。
 - ・ 幼児の普段の環境をよく知り利用することにより、教材への導入をスムーズに行う。
 - ・ 保育者の働きかけにより幼児の意識を高め、製作への高揚感を高める。
 - ・ 素材の持つ面白さなど新しい発見が生まれる。
 - ・ 完成した作品をみんなで鑑賞し、充実感を味わう。

Ⅳ 保育内容

幼稚園教育要領の第2章ねらいおよび内容では“心身の健康に関する領域『健康』，人とかかわりに関する領域『人間関係』，身近な環境との関わりに関する領域『環境』，言葉の獲得に関する領域『言葉』 および感性と表現に関する領域『表現』”の5つの領域が示されている（文部科学省，2017；内閣府他，2018）。これは幼稚園教育の基本である生涯にわたる人間形成の基礎を築くためにはどれも不可欠とされる。

本研究では『環境』、『言葉』、『人間関係』の領域と密接に関わりをもつ指導としての「造形表現」について考察したい。

- 1 『環境』 周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。
- 2 『言葉』 経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。
- 3 『人間関係』 他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う

造形表現とは自分が考えたことや感じたことを目に見える“かたち”に表現するものであ

る。子どもにとって大切なのは“なぜそれを作るのか？”という目的意識であろう。制作する動機付けをしっかりとらせることで制作意欲と完成時の満足度が変化するのではないか。それには、保育者は子ども自身が見たり、触れたりしてどのように感じ、何を発見したのかをよく観察し、どういったものや何を使って表現させるのかの十分な素材研究が不可欠である。

ここでは、絵本の読み聞かせをし、その世界観からのイメージを持って素材を探し出し、自分なりの登場人物（あるいは自分）を創作し壁面や空間に展示させ物語の続きを想像する。

- 1 実習する当幼稚園は広大な面積を持つ森に囲まれた自然豊かな立地に立つ施設を有する。また、このクラスは昨年バス遠足で「小樽水族館」に行き、今年度は近郊の浜辺で地引き網体験をしており魚に対する“イメージ”を持っていると思われる。
- 2 使用する絵本 「にじいろのさかな」（マークス・フィスター，1995）

V 実践内容

『森の水族館を作ろう！』

1 実習幼稚園概要

場所 札幌市近郊にある私立幼稚園

定員 130名程度

特色 当幼稚園は14,000坪の広大な森を所有し、野外保育を積極的にとり入れている。豊かな自然環境に恵まれたその森で、年長児・年中児を中心に、週1回程度のペースで散策に行き、積極的に外遊びを行う指導方針をとっており、基礎的な体力や自然への興味・好奇心を培っている。

2 使用絵本

名称 「にじいろのさかな」

著者 マークス・フィスター：訳 谷川俊太郎：出版社 講談社

*1 あらすじは最終ページに掲載

3 実習計画

実習対象クラス 年長組2クラス 41名（5～6歳）

月 日	活動内容	本時ねらい	教師の活動
11月11日 月曜日 午前	・絵本『にじいろのさかな』の読み聞かせ	・『にじいろのさかな』の内容に興味関心を持つ。	・余裕のある空間と照明に留意する。 ・絵本の持つ世界観をしっかりと事前学習し、伝えるべきメッセージを確認する。 ・落ち葉を使って仲間（さかな）を作ることを伝える。
11月12日 火曜日 午前	・落ち葉採集（屋外散策）	・落ち葉に様々な形や色があることに気づかせる。	・安全面や防寒には十分留意する。 ・必要に応じて手袋を用意する。 ・園に戻ってきてからの葉の始末を必ず行う。 ・落ち葉の種類別・色別分け。
11月28日 木曜日 (本時)	『森の水族館を作ろう！』 ・さかな制作	・拾い集めた葉を色や形を選びながら“形”にする楽しさを発見する。	・作業に適したスペースの確保と座席の配置 ・ベース素材の準備（厚手のボール紙、ダンボール） ・葉を貼り付けるためのボンド（木工ボンド）の用意。 ・完成作品を展示するベースの設置と準備

Ⅵ 保育指導案

(1) 活動名 『森の水族館をつくろう！』

(2) ねらい 読み聞かせによってイメージされた世界観を身近な素材を収集し利用することにより園の壁面に“水族館”を展開させる楽しさをあじわう。

(3) 設定の理由

幼稚園教育要領の『表現』のねらいで「(1)いろいろな物の美しさなどに対する豊かな感性をもつ。」「(2)感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。」「(3)生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。」とある。子どもが日常の中で感じたこと、考えたことを形にして周囲の人に伝え合う楽しさに気づいてほしい。そこで、この活動は晩秋の季節が感じられる落ち葉の色とりどりの美しさと色を利用しさかなをつくる造形あそびを設定した。さらに、この活動への動機づけとして絵本の物語を利用し、各自の“さかな”の性格づけが期待される。

(4) 幼児の実態

日々の生活のなかで、様々なものに出会い興味や関心を持ち活発に活動している。また、体を動かすことが得意な子、歌が好きな子、などそれぞれの個性も顕著にでてくる。

さらに造形活動においても絵画制作や造形表現などに苦手意識をもち、作業が進まない子が出てくるのもこの時期である。それだけに多くのイメージを持たせて作業に取り組みさせたい。今期、園はバス遠足で小樽水族館を訪問している。この課題を通して、そのときの楽しさや記憶もまたよみがえるかもしれない。

(5) 教材観

幼稚園教育要領の第2章『環境』のねらい「(1)身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。」また、『言葉』のねらい「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。」を通して、『表現』のねらいの(1)～(3)を具現化するため特に内容にある「(5)いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ」を組み合わせることを目的にして構成した教材である。さらに本教材は、普段何気なく暮らしている自然と季節の移り変わりに気付かせるという『環境』の内容にも密接に関連していると同時に、自然によって作り出された色彩（落ち葉）を利用し、造形物へのイメージを結びつけるものである。なお、事前の読み聞かせで使用した絵本『にじいろのさかな』は、『人間関係』の「他の人々と親しみ、支え合って生活する」というねらいに関連したお話であり、これを実際に自分たちで作った魚で表現することで前記『人間関係』の深い理解に繋がることが期待される。

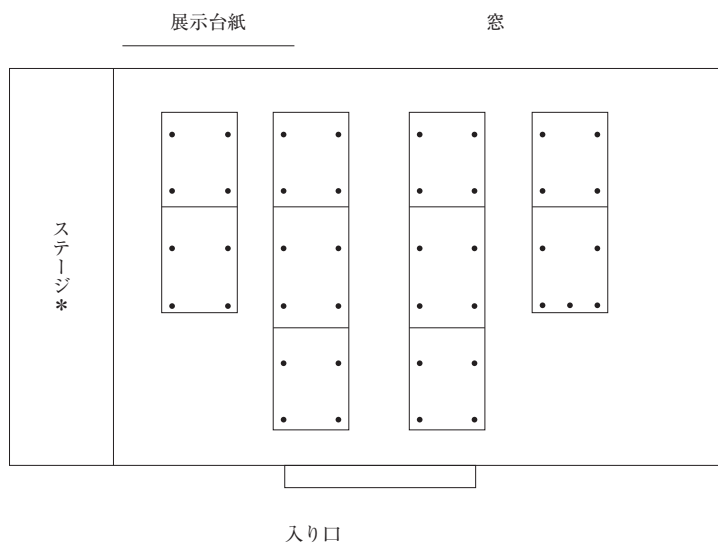
(6) 本時の展開

保育指導案

年 月 日	令和元年 11月28日（木曜日）		
対 象 児	年長組 5歳児（男児 24名・女児 17名 計41名）		
指 導 者	教員 5名		
活 動 名	『森の水族館をつくろう！』		
ね ら い	自然の素材を使い、考えたり工夫したりして自由なイメージを表現する。		
子どもの姿	日常の遊びの中で友達との関わりが積極的になり、仲間をつくって行動するようになる。屋外などでも元気に体を動かし、季節の変化を感じ取っているようである。室内では折り紙や生活帳（スケッチブック）の制作やリズム遊びで体を動かしたりしている。来年少学校に入学するための準備期のためか“成長”の変化が見える。		
本時までの経過	・絵本『にじいろのさかな』の読み聞かせを行い、絵本の世界観を知る。 ・それぞれの“さかな”をイメージしながら、晩秋の季節を感じ、落ち葉を拾い集めて様々な色があることを発見する。		
時 間	予想される子どもの活動	保育士の援助と配慮	評価項目
10：20	ご挨拶	元気よく“ご挨拶”	・欠席や健康状態の確認等

10 : 25	・ 絵本『にじいろのさかな』を見て、思い出す。 ・ 読み聞かせ→落ち葉拾いを思い出す。	・ 絵本の表紙絵を提示 ・ 内容について“あらすじ”を簡単に解説する。 ・ 前回の活動を振り返り、今日の計画を知らせる。	・ 保育士の方に顔を向けているか。
10 : 35	・ 使用材料を見て、自分が作ろうとする作品をイメージする。	・ 作業場所の確認 ・ 前回集めた落ち葉と本日使用する素材や使用方法、完成目標を説明する。	
10 : 40	・ 材料を選んで集める。	・ 必要なパーツと量を確保しているかを確認する。	・ 楽しんで活動に参加しているか。
10 : 45	・ 魚の台紙に目の位置を描き込む ・ 台紙にボンドで枯れ葉を貼っていく	・ 色や大きさを自由にさせ、目の位置を決めさせる。 ・ しっぽから張っていくように声をかける。 ・ 葉の茎をはさみで切らせる。 ・ ひとりひとりに声かけをする。	
11 : 00	・ 完成する。 ・ 作品を壁に貼りに来る。 ・ お片付けをする。	・ 作品貼り付けを手伝う。 ・ 使用した用具やゴミを片付け、整頓する気持ちよさを知らせる。	・ 良いところをほめてあげる。
11 : 10	・ 自分の作品をみんなに見せ、どんな気持ちで作ったかを発表する。	・ どんどころに工夫したか、困ったことはなかった等、発表に困ってる子に話しかける。	・ 友達の作品を楽しんで見ているか。
評価	・ 興味を持ってイメージを表現することができたか。 ・ 作品をつくる楽しさが味わえたか。 ・ 素材や道具を適切につかうことができたか。 ・ 目的のための絵本や素材の選定は適切であったか。		

(7) 教室環境



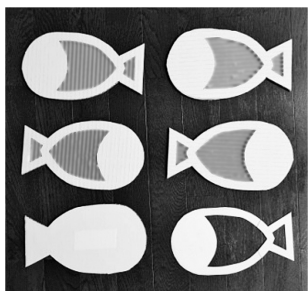
- ・ … 座席（作業位置）椅子の設置（41脚）
- * … 素材等置き場

(8) 環境準備

画材・用具など

- ☐ 作業用テーブル … 10台
- ☐ 作業用椅子 … 41脚
- ☐ 各テーブル … ダンボール台紙（魚の形をした）、ボンド（木工ボンド）、ボンド用トレイ、おしぼり（手拭き用）
- ☐ 各自 … 材料ケース（落ち葉入れ）、はさみ、クレヨン
- ☒ ステージ（素材置き場）… 自然素材（各種落ち葉一葉の形や色の違い別に用意）、新聞紙（机上に敷く）
- ☒ 展示用台紙：子どもの作品を貼る壁面用台紙
- * 保育者用 作業机（説明用の道具置き場および見本作品の展示台）
- * 当日の室温の調整（暖房や換気）を行う。

◎制作用台紙（15cm×25cm，厚さ5mm ダンボール板）



- ・魚の向きがどちらにも対応できるように上下の形を同じにした。
- ・胴体部分の一部の紙をはがし，変化を持たせた。
- ・ダンボールの波も縦・横の二通りを用意した。
- ・白台紙（何も加工していないもの）
 - * 自由に選択できるように多めに準備した。

◎展示用台紙（130cm×370cm 厚さ7mm ダンボール板）



- ・画面をアクリル塗料で描写し画面・左（珊瑚），右上・下（海藻）は別のダンボールに描写し切り取り，Gloss Polymer Mediumで光沢を出したものを貼付け，奥行き感をだした。掲示板にはガンタッカーで設置 針を隠すために別のダンボールで石や海藻を作り，貼り付ける。

◎自然素材



- ・拾い集めた落ち葉を新聞紙や雑誌にはさみ圧をかける。必要に応じて表面の汚れ（土やほこり）をおとしておく。

- ・落ち葉は拾う時期により、色や乾燥状態が変化するので、多くの色彩を楽しむためには期間をずらしながら収集する。桜や楓など形の違いや色の違いを分けて準備する。

◎その他 ・にじうお (50cm×50cm ダンボール板)
うろこ (4cm×6cm) の厚紙にホログラム紙を貼り付け、それぞれをシールにした。

*子どもたちに希望の色を聞き、一枚ずつ外せるようにした。



Ⅶ 本時の活動の様子



← 新聞紙を広げ準備をする。



← 手にいっぱいのボンドをつけながら夢中で張り付けていく。



← クレヨンで目や口を描いた後、ボンドで貼り付けていく。 →

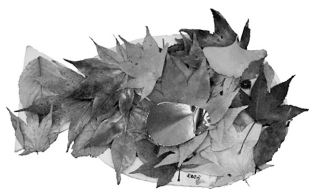


1 子どもの作品

■ 作品 1

- ・大きな葉を大胆に使用し背びれにみたてた。
小さな葉との組み合わせがうまくできている。





■ 作品 2

- ・主に紅葉の葉を使用し、黄色から赤まで移り変わる色の变化を楽しんでいるようである。顔の面までいっばいに貼り付けている。

■ 作品 3

- ・濃い赤の紅葉の広がりをしっぽに利用し、緑の葉と桜の葉を体に用いている。コントラストが美しい。青い目と大きく開いた赤い口が楽しい。



■ 作品 4

- ・多くの葉を重ね密に仕上がっている。黄色の落ち葉をメインに使用し、赤い紅葉がアクセントになっている。
顔の部分にも全体に色づけされている。

■ 作品 5

- ・大きな葉を上下に貼り、羽を元気に広げたようになっている。“飛んでるようだね！”と声を掛けたら、そうそうと大きく頷いてくれた。



2 作品展示

- ・完成した作品に名前シールを貼り、保育士が子どもに自分の魚を泳がせたい場所の希望を聞いて貼り付ける。



3 鑑賞会

全員が貼り付けた後、作品の前に集まり友達作品を鑑賞する。このあと数人に自分のお魚についてアピールしてもらった。一人ひとり発表の後にはみんなで拍手！



《展示パネルでおよぐ全作品》

Ⅷ 実践の成果

本時最初の導入部分での絵本の“内容の問いかけ”ではとても反応が良く主人公の行動や話の流れをよく理解しており、問いかけにも手を上げて発言を求める子どもが多数みられた。数日前の読み聞かせがしっかりと定着していることがよくわかった。このことから、作品制作への説明にもスムーズに入ることができ制作意欲の高さが伝わってきた。

各自が制作に入りボンドの使用法などによる進行時間など個々において差がみられたが、何をしたらよいのかがわからない子どもはいなかった。遅れ気味の女の子が一人みられたが、制作上の戸惑いではなくボンドによる手の汚れを気にしてのことであった。保育者側の早めの声掛けが必要である。今回は道具の説明はあまりしなかったが、子どもは過去の経験から新聞紙の準備やボンドの使用法を学んでいた。全員が完成まで夢中に作業をしており、大きな完成パネルに自分の魚を“泳がせる”のを楽しみにしている様子がひしひしと伝わってきた。また、鑑賞会では自分の作品の工夫した所などを発表し、全体から拍手を受けるなど友達同士をたたえる姿がみられ、創作する喜びを感じたのではないかな。

Ⅸ まとめと発展

今回の事例でもわかる通り、作品を作り上げるための子ども一人ひとりへの原動力となるのは、保育者側の環境作りと子どもへの動機付けの大切さである。それには準備段階での題

材の精選はもちろんのこと、成果をみんなで確かめる場（発表の場）を作ることではないだろうか、それが次回への課題制作への意欲にも繋がるはずである。本時は絵本からの動機付けを行ったが、様々な季節の行事などでもどのような方向からどのような表現を目指すのかを研究し、子どもの思いや興味・関心にこたえるべき研究を重ねたい。

* 1 本研究で使用した絵本 『にじいろのさかな』

内容（あらすじ）

青くて深い遠くの海にそれはそれは綺麗な魚が住んでいました。その魚は、青に緑に、なかにはキラキラ輝く銀のうろこもあります。この魚は、他の魚たちから「にじうお」と呼ばれていました。

にじうおは、自慢のうろこを輝かせながら得意げになっていました。ある日、他の魚が「一緒に遊ぼう！」と声をかけても見向きもしません。またある日は、小さな青い魚が「たくさんあるのだから綺麗な君のうろこを一枚くれないか」とお願いすると「いったい何様のつもりだ！」と一喝するのです。

そんな態度のにじうおを他の魚は避けるようになりました。そして、にじうおは自慢のうろこを誰にも見てもらえないことを悩み、賢いおばあさんタコに相談に行くのです。

タコに相談すると「一番綺麗な魚ではなくなるけれどその綺麗なうろこを他の魚に分けてあげるといい」と言います。にじうおは、自慢のうろこがなくなってどうやって幸せになるのだろうか？と思いました。

にじうおは、他の魚の願いを聞き入れて自慢のうろこをあげてみることにします。すると、その魚はとっても嬉しそうに喜びます。その様子を見たにじうおは、とっても嬉しい気持ちになりました。

引用文献

- 半田結 2017 芸術療法的視点を取り入れた保育実践の可能性 関西福祉大学研究紀要20, 15-24.
マーカス・フィスター（谷川俊太郎訳）1995 「にじいろのさかな」 講談社
内閣府・文部科学省・厚生労働省 幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年告示）2018
フレーベル館
文部科学省 「幼稚園教育要領解説」（平成29年3月31日公示）
文部科学省 初等中等教育分科会 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性 第4節子どもの育ちの現状と背景 2005